

地域共生ステーションづくりワークショップ(第6回)結果

1 概要

- (1) 日時 平成24年8月5日(日) 午前10時から正午
- (2) 場所 長久手市役所西庁舎 3階 研修室
- (3) 参加者16名 事務局：たつせがある調整監他2名
- (4) 配布資料 地域共生ステーションのコンセプトを考えよう！

2 あいさつ(たつせがある課調整監)

3 コンセプトを考えよう！

前回(第5回)ワークショップにおける意見を整理して提示するとともに、長久手市の現状、社会情勢をふまえて、「まちづくりの日常化」という視点でコンセプトを考えていくことを事務局から提案を行った。

(進行役)

前回、コンセプトを決めるということで、会議の中ではまとまりませんでした、たくさん活発に意見を出して頂き、大変意味があったと思っています。

コンセプトについては、小学校区ごとに課題は異なるので、全体のコンセプトを決める必要はないという意見もありましたし、必要だという意見もありました。

ただ、改めて見直すと、基本的にはみなさんが共通した想いを持っていると感じました。そこで進行役として提案ですが、必要かそうでないかを話し合うよりも、必要だという人のために今回ここで、必要でないと言われた方々にとって、足かせにならない程度の意味の合言葉のようなコンセプトを決めたらどうかと思います。

(参加者)

まちづくりを分かち合う、自由と責任を分かち合う交流の場所ということで、「分かち合う個人、個人の交流の場所」というのはどうだろうか。

(参加者)

イベントではなく、日々の暮らしの中で支え合うまちづくりが大切と思うので、「一人ひとりが主人公」を提案する。

(参加者)

集うための「足」が必要であり、集うためのスペース「場」を確保する必要もある。

そして、来やすく、入りやすい施設で、一人で来る人の不安感を取り除くコーディネーターがいるとよい。一言で表すなら、「お互いに支え合える身近な集会所」といった感じで、市のホームページ、回覧板でわかりやすくアピールして欲しい。

(参加者)

共生を実現する場所として、「自分の居場所のある場所」を提案したい。

(参加者)

その小学校区も、15歳～64歳の生産世代人口が一番多い。その人たちが集まれる場所を作ることが大切であり、子育て世代を支援するメッセージをコンセプトに表わすと良いのではないか。

(参加者)

コンセプトというか、大きな方向性を示すようなイメージでよいのではないか。

あまり対象を限定してしまうと、他の人を排除することになってしまう恐れがある。まずは、集うことのできる「場」があることが大切ではないか。

(参加者)

コンセプトは、理念や大きな目的として掲げていけばよいのではないか。

(参加者)

今後、各小学校区に分かれた時に何をするとところなのかを表す、大きなくくりとして示せばよいのではないか。

(参加者)

すべての要素を表現するのは難しいので、キーワードを挙げて大きな方向性を示せばよいと思う。

(参加者)

高齢者が集まれる喫茶店が閉店してしまって、集まれる場所がなくなっている。みんなが集まれる「まちカフェ」みたいなイメージではどうか。

(参加者)

いろんな機能はあっていいと思うが、コンセプトとしてはもっと大きな方向性を示せたほうが良いのではないか。

(参加者)

集まった人がそこで考えて、創ってもよいのではないか。目的がなくても集まれる「ふらっと小屋」というのはどうか。誰でも来やすく、垣根が低い「フラット」(平ら)という意味も含んでいる。

(参加者)

ふらっと来てという意味で、「ふらっと小屋(来やあ)」でも良いのではないか。

(参加者)

自由と責任という言葉が出たと思うが、自由だけを追い求めるのではなく、責任という表現を付け加えても良いのではないか。

(参加者)

「私が主人公」のような言葉を付け加えても良いのではないか。

(参加者)

「一人ひとりが主役」という言葉のほうが、お互いの支え合いを表現できるのではないか。

(参加者)

高浜市のようにNPO法人が自立した運営を目指すなら自由に議論しても良いが、税金を投資して整備する事業であるという意識しながらの検討が必要ではないか。

(参加者)

市が始めようとしているのは市民と行政の役割分担であり、将来的には市民中心の活動を目指しているとは思いますが、今は過渡期だと思う。

現時点で完全な自主運営が可能になるのか、市の補助金を受けながらの活動になるかは分からないが、ある程度の協働、協力は必要ではないか。

(参加者)

今回の事業は、市民と行政がともに実施していこうという中で市民が主導し税金の使い方を決めていこうという新しい試みだと思う。

我々が、まちづくりのリーダーとして選んだ市長の提案で検討している地域共生ステーションについて、我々の議論を受けて市長の考えを示してほしい。

(参加者)

市長は、市民みんなが考えて形を作りだすことが重要と考えているのではないか。

(参加者)

自分たちで考えたことは、自分たちが実行する責任がある。自分たちが行い、みんなが集まってくれるのかという前提での検討が必要だと思う。

(参加者)

我々は自由に議論し行政に対して提案すればよいと思う。

ここでコンセプト（理念）を決めていくことが必要ではないか。

(参加者)

目的が何であれ、人と人がつながって、顔が見えるネットワークが出来上がることが困った人の支援につながると思う。そこに行けば居場所がある、わくわくするものが見つかる場所になるとよいと思う。

(進行役)

たくさんの意見が出されたが、このワークショップのひとつの成果として、キャッチコピーを「ふらっと小屋（来やぁ）～ひとりひとりが主人公～」にしてはどうか。

※大半の参加者の賛同により、決定。

(参加者)

キャッチコピーに異論はないが、税金を投資する以上、自由だけではなく責任を負う必要がある。コンセプトとしては、「自由と責任を分かち合う場所」を提案する。

4 今後の進め方

(事務局)

今回、キャッチコピーという形で地域共生ステーションのコンセプトをまとめたので、今後の進め方について事務局より提案。

西小校区については、候補地も挙げられており、具体的な整備計画、活用方法、地域運営組織の検討を行っていく。それにあたって地域（西小校区内）の回覧板、市広報（9月号）により地域における新たなワークショップ参加者を募っていきたい。

その他の小学校区についても、現在のワークショップメンバーをコアメンバーとして、候補地の情報収集や地域ニーズ（状況）の把握を行いながら、地域の自治会や子ども会などに声かけを行い、校区ごとのワークショップの立ち上げを目指す。新たな参加者を募る上では、現メンバーによる声かけも重要と考えている。

(参加者)

小学校区ごとにステーションを整備するということであれば、校長先生やPTAの方にも参加してもらう必要があると思う。市から参加を要請する考えがあるのか。

また、新たな参加者への呼びかけを市は行ってくれるのか。

(参加者)

ワークショップの事務局として、市のサポートは当然必要だと思う。各地域の特性を活かすためにも、全体の勉強会なども開催して欲しい。

(参加者)

このワークショップについては、区長会には報告しているのか。

区長が何も知らなくては、自治会の協力を得ることができないし、普通の人は積極的にまちづくりに参加してもらえないので、市のサポートが必要である。

(事務局)

ワークショップを開催し、検討を進めていることは報告しているが、議論の内容までは報告していない。

今回、キャッチコピーが決定したので、今後の展開と合わせて報告する予定である。

(参加者)

やる気のある人が動いて、場をつくりながら、呼びかけても良いのではないかな。

あまり行政が介入して既存団体に呼び掛けると、ふらっと立ち寄ることができる場所づくりができなくなってしまうのではないかな。

(参加者)

ここにいる参加者も含めて、まずは自分がやる気になる必要がある。実行委員として、地域組織の運営にも関わっていく気にならないといけない。

その上で、既存の団体である自治会、子ども会、PTAなどに呼び掛けていく、ということでもよいのではないかな。

(参加者)

行政にも限界があり、市民に役割を移行する段階なので、行政にお願いすると同時に、自分ができる範囲で知り合いなどに声をかけてもよいのではないのか。

今回は新しい試みであり、失敗しても良いので、知恵を出し合い、思いつくことをまず行動してみればよいと思う。

(参加者)

既存の団体にこだわらず、自分たちのできる範囲で行動を始めることが大切。

(参加者)

あまり小学校区に限定せず、まずは候補地を選定してワークショップ全体で検討を進めてもよいのではないのか。

候補地の決まっている西小校区も、まずはアンテナショップ的な位置づけとして検討してもよいのではないのか。

(参加者)

小学校区の名称を付けるのではなく、第1、第2ステーションのような形で検討を進めればよいと思う。校区名をつけると、他の校区の人が参加しづらくなる。

やる気のある人を集めることが重要ではないか。

(参加者)

従来の大字区と小学校区は異なっており、地域の方は区単位で活動しており、違和感を覚える。

(参加者)

小学校区のような大きな地域単位ではなく、子どもも高齢者も誰もが歩いて行ける、身近でふらっと立ち寄れるような地域単位が良いのではないのか。

例えば、集会所を活用することが現実的で、実験的な取組みにも適していると思う。

(参加者)

自分は、自分でやりたいことがあって参加している。個人、個人が何をやるのかを具体的に考えることが大切だと思う。個人が始めたことに対して人が集まると思う。

次の段階では、何をやるのかを提案、検討する場を設けてほしい。

(参加者)

何をやるかを考える際には、地域のニーズを把握する必要がある。

(参加者)

アンケート等により地域のニーズを把握したり、地域を歩いて聞き取り調査を行う必要もあるのではないのか。

（事務局）

今後の進め方を検討するうえで、場所、運営を担う人・組織、何をするのか（実践プログラム）といった3つのポイントが重要になると思いますが、進め方としては、すぐに小学校区に分かれていくのではなく、西小校区内の空き施設で検討を進めるアンテナショップ的な「第1ステーション」も含めて、全体で検討を進めていこうという議論でした。事務局として、今日の議論を含めて、今後の進め方をご提案させていただきます。

なお、本日決まりました「コンセプト（キャッチコピー）」につきましては、広報9月号にワークショップの成果として、新メンバー募集と合わせて掲載いたします。

5 副市長講評

6 地域づくり講演会のご案内★

日 時：平成24年10月21日（日）10：00～11：30

場 所：市役所西庁舎3階 研修室

講 師：山崎 亮氏（コミュニティデザイナー）

studio-L 代表・京都造形芸術大学教授

（以上）

地域共生ステーションづくりワークショップ(第6回)

次 第

日時：平成24年8月5日(日)

午前10時から11時30分まで

場所：市役所西庁舎3階 研修室

1 コンセプトを考えよう！

2 今後の進め方

【配布資料】

資料 地域共生ステーションのコンセプトを考えよう！

★地域づくり講演会のご案内★

●日時 10月21日(日) 10:00~11:30

●場所 市役所西庁舎3階 研修室

●講師 山崎 亮氏(コミュニティデザイナー)

Studio-L 代表。京都造形芸術大学教授。

地域の課題を地域に住む人たちが自身で解決するための
コミュニティデザインに携わる。

朝日新聞デジタル「シアワセをデザインする」連載中。

地域共生ステーションのコンセプトを考えよう！

現状

社会情勢

- ・自治会の加入率が低い地域がある
- ・まちづくりや地域活動への関心・興味はあっても参加の方法がわからない人が多い
- ・65歳以上の高齢者が7,000人以上いて、時間と能力、意欲のある高齢者が活躍する場が必要になってくる(住基人口 2012.6.30)
- ・まちづくりへの意識が高いが、参加に偏りがある
- ・市職員が事務局となって事業を進めることが多い
- ・市役所が計画したことに住民が参画(=古い公共)
- ・市民と市民、市民団体と市民団体、そして市民と市役所のつながりがあまりない
- ・住民が気軽に集まれる施設が少ない
- ・目的もなくふらっといける場がない
- ・これまでの公共施設は使い方が限定されていて、特定の人や団体しか利用していない
- ・市職員は、なかなか現場に出れないので、現場で何が起きているのか把握できない

- ・人口減少、少子高齢化
- ・自殺者、いじめ、不登校、うつやひきこもりの増加
- ・無縁社会
- ・行政が担う範囲の限界
- ・新しい公共～すべての人に役割と居場所があり、みなが人に役立つ歓びを大切にする社会
(「新しい公共宣言」2010.6)
- ・地域活性化の手法としての「コミュニティデザイン」に注目
～人と人がつながる仕組みづくり
- ・「第4の消費」～つながりをうみだす社会へ シェア志向～シェアハウス、シェアタウン 自分を開き、家を開く
- ・新しい地域交流・まちづくりの拠点が各地でうまれている

視点 「まちづくりの日常化」

まちづくりを、特別なことではなく、日常的なこと(毎日の暮らしの中で感じる疑問や課題を解決していくこと)としてとらえる

コンセプト

コンセプトとは・・・

地域共生ステーションとは何か？を一言で表現したもので、これから市内各地にいろんな人を巻き込みながら、広がっていくときに、常に意識して、拠りどころとなるものです。

実施展開

各小学校区

- ・校区ごとのワークショップ立ち上げ
- ・地域ニーズの把握
- ・対象施設の候補地探し

- ・地域を運営する(支える)組織づくり
～キーマンの発掘と中核となるスタッフ組織

- ・地域ネットワークづくり

西小校区 9月～